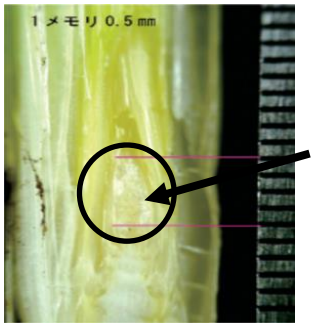
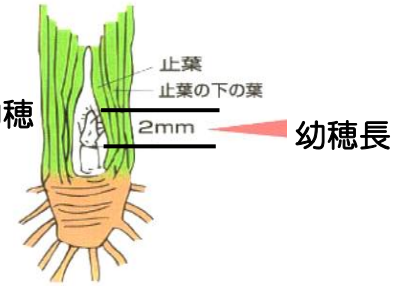
営農技術情報

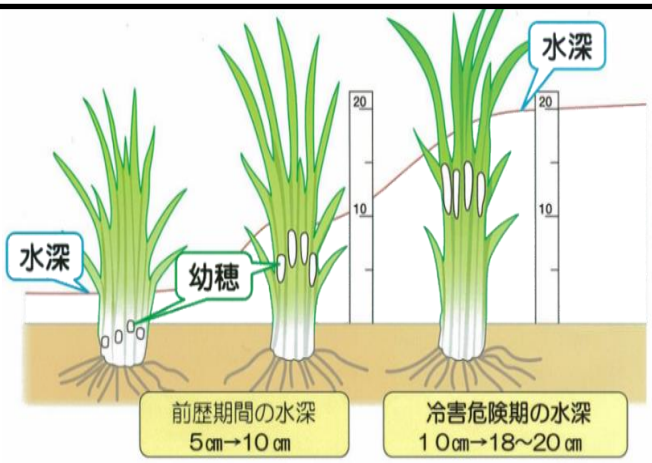
発行　令和５年６月22日
第８号
たいせつ農業協同組合
営農部　農産販売課
本所　営農センター　57-2357
支所　営農センター　87-4111

６月 15 日の生育調査によると、作柄は平年並みとなっております。また、ほ場ごとに生育のバラつきがあり、平年よりも幼穂形成期（平年６月 27 日）が早まるほ場も出てくる可能性がある為、移植の早いほ場を優先的に確認しましょう。

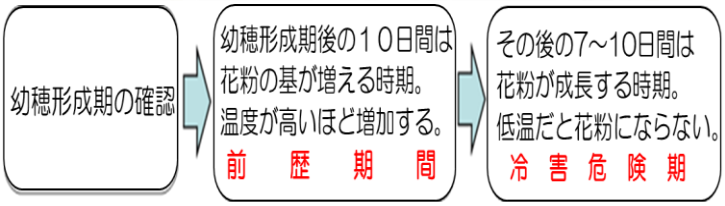
○幼穂形成期の確認・水管理について







Check！
平均的な株の主茎を 3~5 本取り、カッターナイフ等で縦に切断※して幼穂長を確認し、上図のように 2mmに達していれば幼穂形成期です。
※手の怪我に注意！！



○ケイ酸追肥を実施しましょう

稲のケイ酸吸収は幼穂形成期以降に増加し、成熟期まで継続します。ケイ酸追肥の効果としてタンパク含有量の低下、根の活力増大や茎の耐倒伏性の向上などが期待できるため、ケイ酸追肥を検討しましょう（下表：主なケイ酸資材）。

施用資材名	使用量	使用時期	期待できる効果
粒状ケイカル ・ スーパーミネカル　等	20 kg/10ａ	幼穂形成期１週間後	・精米蛋白含有率の低下 ・不稔発生の軽減 ・耐倒伏性の向上　等

○前歴期間の水管理

幼穂形成期を確認したら水深を５ｃｍから徐々に１０ｃｍまでの深水とし、水温を維持しましょう。用水量が豊富な場所での急激な入水や用水量の足りない場所でも毎日入れ続けることはせずに、ほ場を冷やさない様にしましょう。

	６月	７月		
	下旬	上旬	中旬	下旬
生育期節	幼穂形成期		止葉期	出穂期
	前歴期間		冷害危険期	
	幼穂形成期から 10 日間		冷害危険期後７日程度	
管理	深水管理			溝切りの施工 中干し